



東京の存在感 さらに高めるために FEC東京国際フォーラム 小池百合子東京都知事

一般社団法人民間外交推進協会（FEC）は7月23日、小池百合子東京都知事、松本明子東京都女性活躍推進監を迎え、「2050東京戦略と東京の国際競争力」「全国へ拡げよう、女性活躍の輪～Women in Action」をテーマに、FEC東京国際フォーラムを開催した＝写真。冒頭、松澤建FEC理事長は、東京都が「2050東京戦略」のもと、国際競争力の強化や持続可能な都市づくり、女性活躍の推進などさまざまな施策を積極的に展開していることに触れた。その上で、小池都知事と松本女性活躍推進監による講演を通じ、東京の未来と持続的な成長について理解を深める機会となることへの期待を述べた。



「Win-Win-Win」の関係へ

【松本明子氏 講演要旨】

女性活躍推進監として、女性も男性も、誰もが力を発揮し輝ける社会の実現に向けた取組を進めている。本日は「全国へ拡げよう、女性活躍の輪～Women in Action」をテーマに、その一部を紹介したい。

今年は男女雇用機会均等法施行から40年という節目の年である。私自身、均等法施行後に都庁へ入庁し、就職活動や職場で男女間格差を実感した。私たちの世代は制度の過渡期にあり、先輩方が切り開いた道をさらに広げながら歩んできた実感がある。

その後、育児・介護休業法や女性活躍推進法など法整備が進み、企業等による取組が広がった結果、女性の就業率は54%まで上昇し、第1子出産後も正社員として働き続ける女性の割合は約83%まで伸びた。一方で、日本はジェンダー・ギャップ指数で148カ国中118位と、政治・経済分野で大きく立ち遅れている。人口の半分を占める女性の力を十分に生かしていないことは、日本にとって大きな損失である。女性役員比率の高い企業の方が、企業パフォーマンスが高いという報告もあり、投資家も女性活躍を企業価値に関わる重要な指標として注目している。また、女性活躍が進めば、2040年の実質GDPの減少幅を約40兆円抑えられるとの試算もあり、女性の自己実現が企業、日本全体の成長につながる「Win-Win-Win」の関係を東京都は目指している。その実現に向けた起爆剤として、今年7月、全国初となる「東京都雇用・就業分野における女性の活躍を推進する条例」を施行した。条例の理念を浸透させていくため、指針や事例集、相談窓口を整備するとともに、更衣室やトイレ整備への助成、男女間賃金格差の見える化、女性管理職育成、フェムテック導入支援などを進めている。

「女性が働きやすい環境は、誰もが働きやすい環境である」というメッセージを広げていきたい。女性活躍は行政だけで実現できるものではない。東京都は「女性活躍の輪～Women in Action」



小池百合子都知事（右）と松澤建FEC理事長

のもと、企業や自治体等と連携し、東京から全国へ取組を広げている。その一環として、「東京女性未来フォーラム」には340社を超える企業が参画している。また、女性起業家支援「APT Women」やファンドの設立などを通じて、女性起業家の育成やスタートアップ支援にも力を入れている。APT Womenではこれまでに320人の女性起業家を支援し、累計資金調達額280億円超、大手企業との連携1190件以上、海外展開140件以上の成果を上げている。さらに、東京都自身も意思決定の場への女性登用を進めており、審議会における女性委員比率は約50%に。女性職員へのメンター制度や管理職試験受験の後押しを進め、直近では管理職試験合格者の約4人に1人が女性となった。このほか、女子中高生向けの企業のSTEM部門を訪問するオフィスツアーや、卵子凍結・無痛分娩への助成、保育施策、「育業」の推進など、ライフステージを通じて女性の選択肢を広げる施策を進めている。一人ひとりが輝ける環境を整えることが、東京、日本、そして持続可能な世界の発展につながる。今年は女性活躍推進条例の施行元年である。この条例を契機に、企業や自治体、地域社会と連携しながら、ともに東京から女性活躍の輪を全国へ広げていきたい。

施策を進める3つの鍵

【小池百合子都知事 講演要旨】

私からは、日本、そして東京の持つエネルギーをさらに生かし、世界の中で輝く東京であり続けるための取組についてお話ししたい。

先日、姉妹都市であるニューヨークを訪問し、国連経済社会理事会（ECOSO

C）で持続可能な社会の実現に向けた東京都の取組を紹介するとともに、世界的な大学であるニューヨーク大学（NYU）と連携協定を締結した。今後、東京におけるキャンパス整備の検討を含め、学術交流や人材育成を進めていく。AIの急速な進展により社会が大きく変化する中、「何を学び、何を教えるべきか」を追求しながら、東京の魅力をさらに高めていきたいと考えている。

今年8月で都知事就任10年を迎える。この間、デジタル化の推進やコロナ禍への対応などさまざまな課題に取り組んできたが、私が最も重視してきたのは、人々が夢や希望を持ち、自己実現できる環境を整えることである。その成果の一つとして、東京都では10年ぶりに出生数が増加した。結婚や出産は一人ひとりの自由な選択であり、その選択肢を広げ、安心して選べる環境を整えることが重要である。また、一人ひとりの力を高めていくことも重要である。さらに、近年激甚化する自然災害に対応する危機管理は都市の重要な使命である。そのため、「人への投資」「イノベーション」「多都市間連携」の3つを鍵として施策を進めている。

まず、人への投資では、高い能力を持ち、意欲ある女性の力を十分に生かすことが企業や社会の成長につながると考えている。東京都では、「育児休業」ではなく「育業」という愛称をつけて気運を醸成。男性の育業取得率は10年前の4.5%から61.2%へと大きく向上した。また、婚姻件数も2年連続で増加しており、安心して結婚や子育てができる環境づくりを進めている。さらに、7月に施行した女性活躍推進条例を契機に、女性がより活躍できる職場環境づくりを企業



松本明子東京都女性活躍推進監

の皆様とともに進めていきたい。

グローバルに活躍する人材の育成も重要である。海外留学を希望する若者が減少し、海外勤務を敬遠する傾向も見られるが、日本が内向きになれば世界から取り残されかねない。AIなど新たな技術に果敢に挑戦する人材を育てていくため、最先端技術によって持続可能な社会の実現を目指す「SusHi Tech Tokyo」を開催し、現在では世界中のスタートアップや投資家が集うアジア最大級のスタートアップ・カンファレンスへと成長している。有楽町のスタートアップ支援拠点「Tokyo Innovation Base (TIB)」では、全国のスタートアップや投資家、自治体などが交流し、新たなイノベーションを生み出す場となっている。さらに、金融ハブ機能の強化に向けて、行政手続のワンストップ化や多言語対応を進め、インターナショナルスクールの整備など、高度外国人材の確保に向けた環境整備にも力を入れている。

世界の都市との連携も重要であり、都が創設した国際都市ネットワーク「G-NETS」や東南アジア諸国の首都との連携を進める「TOKYO-SEADS」を通じて、災害対策や都市の強靱化など共通課題について情報や技術を共有している。国家間では合意形成が難しい課題もあるが、現場を担う都市同士が直接連携することは極めて実践的であり、人々の命を守ることにもつながる。今後も世界とのネットワークを広げ、変化の激しい国際社会の中で、世界から信頼され、尊敬される東京を築いていきたい。その実現に向けて、行政だけでなく、民間外交推進協会をはじめとした民間の力を大いにお借りし、世界の中での日本、そして東京の存在感をさらに高めていきたい。

理事長対談シリーズ⑨ 松元崇国家公務員共済組合連合会理事長 × 松澤建FEC理事長

「幸せの源泉」社会全体で再考を

官僚としての歩み

大蔵省入省と各局での経験

松澤建理事長 本日は、国家公務員共済組合連合会理事長であり、元内閣府事務次官の松元崇先生をお迎えしまして、これまでのご経験、財政・経済・歴史へのご見識、現在のご活動について伺います。まず、大蔵省に入省された経緯をお聞かせください。

松元崇理事長 私は大学時代にボートをやっており、1年留年しました。同級生の何人かが大蔵省に入っていて、話を聞くうちに面白そうだと思った。それがきっかけです。最初から明確な志望理由があったというより、先輩や同級生の話に刺激を受けた形でした。

松澤 主税局、証券局、主計局などのご経験の中で、特に印象に残っているお仕事をお聞かせください。

松元 最初に配属されたのは主税局でしたが、当初は見習いのような立場でした。その後、課長補佐、主税企画官として主税局に戻り、消費税率を3%から5%へ引き上げる際には、与党税調の担当として与党の先生方との調整に携わりました。当時は自民党政権の頃でした。

証券局では、証券投資顧問業法、のちの金融商品取引法にも関わりました。新しい法律を作る作業は、局長以下、末端の係員に至るまで、多くの人々のチームワークによって成り立つものです。その経験は、その後の役人人生にとっても大変貴重でした。

主計局には比較的長くおりました。当時は食糧庁があり、食糧法の下で米を中心とする食糧行政が行われていました。その関係で農業の構造改革にも関わりました。日本の米には海外との価格差、いわゆる内外価格差の問題があり、米作りの生産性を高め、その差をどう縮めるかが議論されていました。戦後初めての米価の引き下げにも関わり、その後、農林関係の主計官も務めました。農林関係は通算で7年ほど担当しました。

松澤 内閣府では、政策統括官、官房長、事務次官を歴任されました。省庁横断的な政策調整で重視されたことは何でしょうか。

松元 経済財政担当の統括官の時には、麻生内閣のもとで「安心社会実現会議」が設けられました。成熟社会の中で

日本が発展していくには、何度でも再チャレンジでき、女性も活躍できる社会にする必要がある。そのためには、しっかりした財政基盤も整えなければならない、という報告を与謝野大臣の下でまとめました。これは強く印象に残っています。

官房長の時には東日本大震災がありました。これは本当に大変な経験でした。事務次官の時には第2次安倍内閣のもとで、アベノミクスの成長戦略の策定にも関わりました。内閣府は大臣が多く、省庁横断的な調整が重要です。それぞれの大臣が仕事をしやすいようにお支えることが、私の一番の仕事だったと思います。行政官として大事なものは、国民生活をより良くしていくことです。国民全体の奉仕者として、政治主導のもとで政治を支え、公共の福祉のために仕事をします。振り返ると、官僚としての歩みはそういうことだったと思います。

スタンフォード大学で見た

「ジャパン・アズ・ナンバーワン」

松澤 先生は1978年から80年にかけて、スタンフォード大学に留学されています。当時のご経験をお聞かせください。

松元 スタンフォード大学のビジネススクールに留学しました。当時はカーター政権からレーガン政権へ移る頃で、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われていた時代です。アメリカ人の学生たちは「なぜ日本はそんなに強いのか。日本のビジネスを勉強したい」と言っていました。そこでアメリカ人の学生たちと一緒にサークルを作り、日本企業や日本の経営について議論しました。それが非常に思い出深く、貴重な経験です。アメリカ人の学生たちは、日本の経営に強い関心を持っていました。

卒業時には、学生300人ほどの中で学年に最も貢献した学生に贈られる「アーバクル・アワード」をいただきました。日本の新聞では最優秀学生と報道されましたが、そういう形で表彰されたことも印象に残っています。

松澤 当時は、日本が非常に注目されていた時代ですね。

松元 エズラ・ヴォーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が話題になり、セオリーZのような議論もありまし



松元崇国家公務員共済組合連合会理事長（左）と松澤建理事長

た。私たちのサークルでは、ソニーの盛田昭夫さんに来ていただき、学長を交えてお話しいただいたこともあります。

一方で、当時アメリカに行っていた日本のビジネスマンの多くは、早くアメリカン・ビジネスを学べと言われていました。ところが、アメリカ人の学生からは「日本には何か秘密があるのだろう。教えてほしい」と聞かれる。そのギャップが面白かったですね。レプロンの関係者と話した時も、日本には「ちふれ」のような100円化粧品があると話すと、「化粧品は原価で売るものではない。研究開発や広告にお金がかかり、顧客である女性に使えばきれいになれると心から思ってもらわなければ売れない」と言われました。そうした議論も大変面白かったですし、勉強になりました。

財政・経済・歴史へのご見識

デフレ後の日本経済と成長への課題

松澤 続いて、日本の財政・経済について伺います。低成長からの脱却に向けて、日本はどのような課題を抱えているとお考えでしょうか。

松元 低成長からの脱却については、これまでいろいろなところで書いてきましたので、ここで詳しく繰り返すことはしません。少なくとも日本はデフレではなくなりました。ウクライナや中東での戦争を背景に世界的なインフレが起き、それで日本もインフレになったのかもしませんが、いずれにしてもデフレの時代ではなくなりました。デフレの時代は、どうしても元気が出ません。これか

らは日本経済もしっかり成長していくのではないかと考えています。

少子化をめぐる問題意識

松澤 少子高齢化と社会保障、財政運営の問題も避けて通れません。少子化については、どのようにお考えでしょうか。

松元 大きな問題は少子化です。子どもが少なくなると、社会全体の元気がなくなります。最近では、子どもを持つことについて、コストがかかるという議論ばかりが目立ちます。しかし、日本では昔から子どもは「子宝」と言われ、子どもを持つことは幸せなことでした。山上憶良の歌にも、「銀（しろがね）も金（こがね）も玉も何せむに、勝れる宝、子にしかめやも」というものがあります。江戸時代の末期に日本へ来た西洋人は、日本人が子どもをととても可愛がることに驚いていました。

もちろん、家族関係や働き方は変わっています。子育てと仕事の両立が大きな課題になっていることも事実です。共働きの女性が大変であることも事実です。子育てのコストを社会全体で軽減することは大事です。しかし、その面にはかなり注目しては少子化問題は解決しないのではないか。子どもを持つことは幸せなのだという感覚を、もう一度思い出す必要があると思います。もちろん、若い世代に対しては、もう少し手厚い社会保障が必要です。子どもを持つコストを社会全体で支え、若い人たちが安心して家庭を持てる社会にしていけることが必要です。

熊本県の企画開発部長時代



農林主計官時代のオーストラリア現地視察（中央）



アーバクル・アワード受賞式（中央）

東京

センコーグループ

TOKYO EAST SIDE HOTEL KAIE

東京イーストサイド ホテル権会 TEL.03-3699-1403
東京都江東区潮見 2-8-11 <https://www.hotelkaie.jp>

豊洲

潮見

JR 京葉線潮見駅 東口前

東京駅から7分。舞浜へは9分。
観光地へのアクセス便利な好立地！

地球はつづく、
化学でつなぐ！

東亜合成

松澤 子どもは一番の宝であるというお話は、日本人の心に今も残っている大事な感覚だと思います。人口を増やすこと、少なくともこれ以上減らさないことは極めて重要ではないでしょうか。

松元 おっしゃる通りです。これは日本に限らず、ヨーロッパ、韓国、タイ、シンガポールなどでも出生率は大きく低下しています。先進国だけでなく、アジアの国々にも共通する課題になっています。

子どもを持つことは幸せの源泉なのに、それをコストとして考えてしまうと、少子化問題は解決しません。「失われた30年」の初期には、負債、設備、雇用の「3つの過剰」を削減することが日本経済再生のために必要だと言われ、それをコストと考える企業が増えました。しかし、負債、設備、雇用は、本来は成長の源泉です。銀行からお金を借り、工場を作り、労働者を雇って、企業は成長していく。それをコストと考え、削減によって収益を上げようとしたため、日本の経営は消極的になってしまいました。

それと同じで、子どもを持つことは幸せの源泉です。これをコストと考えてしまえば、少子化問題は絶対に解決しないと思います。若い頃は夫婦2人で楽しく暮らせばよいと思うかもしれませんが、しかし、やがてどちらかが先に亡くなります。すると、寂しいと思う人が多いのではないのでしょうか。もちろん人によって違いますが、子どもを持つことの意味については、社会全体でもう一度考える必要があります。

日本人は、長生きそのものを絶対的な価値としてきたわけではありません。『竹取物語』の最後では、かぐや姫が不老長寿の薬を残しますが、帝はその薬を富士山の上で燃やしてしまいます。不老長寿そのものよりも、現世を意味あるものとして生きることを重んじる感覚が、日本人にはあるのだと思います。

ラフカディオ・ハーンが、日本人の幸福感について書いています。日本人にとっては、周囲の人が幸せであることが自分の幸福である。自分だけが極端に豊かなより、周りの人がほどほど豊かなのが自分の幸福であるという感覚です。そこに日本人の幸福観の特徴があるのではないのでしょうか。こうした幸福観も、少子化を考える上で大切な視点だと思います。

財政規律と成長戦略のバランス

松澤 財政規律と成長戦略のバランスについては、どのように考えるべきでしょうか。

松元 どちらが先かという議論をしても仕方ありません。成長しなければどうにもなりませんし、財政をおかしくしてしまえば、経済もおかしくなります。これからインフレの時代になって心配なのは、財源がないまま、ばらまきのような政策ばかりが行われることです。それを続ければ、インフレがさらにひどくなり、経済の活力も失われます。中南米のかなりの国々は、そうした状況に陥って

しまったのではないかと感じています。日本もそうならないよう、十分に注意しなければなりません。

高橋是清・山縣有朋から学ぶこと

松澤 ご著作では、高橋是清や山縣有朋など、歴史上の人物を通じて財政や社会制度を考察されています。高橋是清からは、どのようなことを学ぶべきだとお考えですか。

松元 高橋是清は、財政規律を重視しながら、必要な時には大胆な財政出動も行う、きわめて柔軟な人物でした。状況を見ながら政策を使い分ける現実感覚があったのだと思います。何より学ぶべきことは、彼が楽天的であったということです。若い頃にアメリカへ行って奴隷同然の扱いを受けたり、特許局長官まで務めた後にペルーの銀山事業で失敗し、破産したりもしました。それでも決してめげず、明るく楽天的だった。七転び八起きで、「だるま大臣」とも言われました。こうした姿勢は非常に大事だと思います。

松澤 山縣有朋についてはいかがでしょうか。

松元 山縣有朋についても、調べてみて改めて面白い人物だと思いました。一般には日本陸軍の父として知られていますが、地方財政、地方自治の父とも言われる、日本の地方制度を作った重要人物でもあります。そして、非常によく勉強した人でした。

明治維新期の日本は、「富国強兵」と言われますが、当時の日本は富国でも強兵でもありませんでした。だからこそ富国強兵を目指したのです。当時の清国には4億の民がいると言われ、日本の人口は4000万弱でした。どちらも農業国ですから、国力は清国の方がはるかに大きかった。日清戦争までは清国の海軍も非常に強力で、定遠、鎮遠といった大型軍艦もありました。そうした中で、日本は西欧の植民地にならずに近代化していかなければなりませんでした。山縣にとって地方制度を整えることも、独立した近代国家として日本を成り立たせるための基盤づくりだったのだと思います。どうすれば独立を守りながら近代化できるのかを、山縣は一生懸命考えたのです。そういう意味で、「公」というものを非常によく考えた人物だったのではないのでしょうか。

財政史から歴史を見る視点

松澤 財政史や近代日本史を、現代に生かす視点についてもお聞かせください。

松元 大事なのは、イデオロギーを抜いて歴史を見る感覚だと思います。戦後の歴史書には、マルクス主義史観の影響を受けて、日本はずっと軍国主義の国だったとするようなものが多くありました。もちろん戦前の日本に軍国主義があったことは事実です。しかし、明治の初めから一貫して軍国主義でアジア侵略を進めたというような単純な見方では、歴史を正確に理解できません。

財政史は、毎年の予算で何にいくら配



松元崇 1952年東京都生まれ。国家公務員共済組合連合会（KKR）理事長。東京大学法学部卒業後、大蔵省（現財務省）に入省。スタンフォード大学MBA。財務省主計局次長などを経て、2012年に内閣府事務次官。著書に『大恐慌を駆け抜けた男 高橋是清』など多数。（一社）民間外交推進協会監事。



ボートのエイトのスタート(手前から2つ目のボート、左から2人目が松元氏)

分されたかを見るものです。数字を追うことで、時代の優先順位も見えてきます。そこにはイデオロギーとは別の、当時の状況が具体的に表れます。歴史を見る時には、人間にはどうしても偏見があるのだということを自覚しながら考える必要があると思います。

退官後の活動と共済組合での取組

退官後の活動と後進育成

松澤 退官後のご活動について伺います。官界での経験を、公益・民間分野でどのように生かしておられますか。

松元 現在は国家公務員共済組合連合会の理事長を務めています。この年齢になると、後進を育てたいという気持ちが強くなります。官民の若手・中堅人材が学び合う勉強会である浩志会の会長や、フォーラム21の理事長を務めています。若い人に頑張ってもらいたいと思っています。聞かれれば、自分の経験を話そうにしています。どのように経験を生かしているかと言えば、先輩方が若い人を指導してこられたことの真実事をしているということかもしれません。

共済組合の役割と今日的意義

松澤 国家公務員共済組合連合会理事長として、共済組合制度の役割をどのようにお考えでしょうか。

松元 共済組合の基本的な役割は年金です。国家公務員の年金を安全かつ有利に運用し、老後の生活を支えることが大きな仕事です。地方公務員共済組合連合会も同じ役割を担っています。そのほか、病院や宿泊施設も運営していますので、多くの方に利用していただければと思っています。

松澤 先生の家族観を伺い、先生に対する印象が一層深まりました。ご自身もご家族と仲が良く、その幸せを多くの人に共有してもらいたいというお気持ちで、今のお話をされたのではないかと思います。

松元 その通りです。

ボートを通じた後輩支援

松澤 先生は大学時代にボート部に所



ダブルスカル(手前が松元氏)

属されていました。現在も後輩たちへの支援活動をされているのでしょうか。

松元 ボートはお金がかかる競技です。最近は大学からの支援も限られてきていますので、私は現在、東大ボート部OB会の会長として、現役選手を支える活動に取り組んでいます。競技を続けるには艇や合宿などにも費用がかかります。私自身も大学時代はOBの支援を受けながら、全日本選手権のエイトや対校フォアに出場しました。

今は、OB会を一般社団法人化し、経理を明確にすることで、企業からの寄付も受けやすくなりたいと考えています。現役選手がより良い環境で活躍できるよう、資金面を含めて応援していくことが大きな課題です。

一昨日も東日本選手権の応援に行きましたし、先週の日曜日には、瀬田川で行われた京都大学と東京大学のボートレースにも行ってきました。ボートは、やっている時は本当に大変で、いつも辞めたいと思っていました。「3食昼寝付き、ただし重労働あり」というような競技ですが、振り返ればやはり良い経験でした。

松澤 エイトが進む姿は美しいですね。ボートは英国の大学の伝統とも関係が深いように思います。日本でもそうした影響があるのでしょうか。

松元 やはりイギリスの影響を受けたのだと思います。明治の初め、海軍がカッターの訓練を取り入れた影響もあったのでしょう。東大のスクールカラーは淡青、京都大学は濃青ですが、これもボートレースに由来しています。そういう意味でも、歴史のある競技です。

松澤 本日は、官僚としての歩みから、財政・経済、歴史、少子化、退官後の活動に至るまで、大変貴重なお話を伺うことができました。本日は誠にありがとうございました。

松元 ありがとうございます。



ホームセキュリティは
ALSOK

ALways Security OK 新潟総合警備保障株式会社
0120-39-2413 (年中無休 24時間受付)

<https://www.ngtalsok.co.jp/>



【7月27日】
ペルー独立205周年記念レセプションに
てフランシスコ・テンヤ・ハセガワ駐日
大使（右）と松澤建FEC理事長



【7月29日】
ギラッド・コーヘン駐日イスラエル
大使の送別レセプションにて大使
（右）と松澤理事長

FEC 活動日誌

今後の催しのご案内

第52回米国研究会

9月3日(木)14:00~15:30

【テーマ】米国から展望する世界情勢・国際秩序
【講師】大矢伸(株)双日総合研究所チーフアナリスト
【会場】オンライン



第309回国際研究会

9月17日(木)14:00~16:00

【内容】台湾ビジネスフォーラム
【講師】蔡明耀台北駐日経済文化代表処副代表
【会場】台北駐日経済文化代表処



第310回国際研究会

9月29日(火)14:00~16:00

【テーマ】未定
【講師】齋木昭隆(公財)中東調査会理事長
(元外務事務次官)
【会場】明治記念館



第128回ロシア研究会

10月6日(火)14:00~16:00

【テーマ】最新のロシア情勢と今後の戦争（和平）の
行方
【講師】石川一洋・ジャーナリスト
(元NHK解説委員)
【会場】如水会館



FECの催しは会員以外の方もご参加可能な場合がございます。ご関心のある方や詳細をお知りになりたい方は事務局までお問い合わせください。

協会だより

【新名誉会員】

フレイン・パウルソン氏（アイスランド大使）

英国バーミンガム大学にて国際外交学修士号取得。2005年外務省入省、在上海総領事館総領事、在ロシア大使館副館長、17年在米国大使館首席公使及び米国防衛駐在官、在ノーフォークアイスランドNATO変革連合軍国家リエゾン代表等を歴任後、21年人事局長外務事務次官。25年より駐日大使。



詳細、最新情報は本協会ホームページ（<https://www.fec-ais.com>）をご覧ください。事務局（電話03-3433-1122）にお問い合わせ下さい。いずれも定員に達し次第締め切りとさせていただきますので予めご了承下さい。



100年の歴史を 紡ぐカクテル

1924年に誕生した帝国ホテル初の
オリジナルカクテル「マウント フジ」を
ご堪能ください。



帝国ホテル

ONE SAKURA
つなぐ力が医療をさらに強くする

<皆様のウィルスから守る!> <がんの迅速診断に!>

サクラ精機株式会社
<https://www.sakurajp.com>

サクラファインテックジャパン株式会社
<https://www.sakura-finetek.com>

サクラグローバルホールディング株式会社
<https://www.sakuraghc.com> TEL: 03-3270-1666

Hotel & Resort
SHIMODA BAY
KUROSHIO
下田ペイクロオ

ご予約: 0558-27-2111 <http://www.baykuro.co.jp> 静岡県下田市柿崎 4-1